

FIFA World Cup から見るボールの変遷と戦術の関わりについて

The Change in Soccer Balls and Involvement of Tactics Seen Through the FIFA World Cup

1K07B088-0

主査・倉石平

小山季絵

副査・広瀬統一

【動機・目的】

用具・道具の進化が成績に結びつきやすい種目とは異なり、サッカーにおいては「個人」と「組織」の進化が未来図を描いてきたものと考えていたが、近年はその個人と組織に「用具」が加わったことを感じずにはられない。その始まりとも言えるのが、4年前の2006年FIFAワールドカップドイツ大会であり、今でこそ聞き慣れたブレ球を量産させた大会である。ドイツ大会で使用された公式使用球の「チームガイスト+」にさらに改良を加え、真球に近づけたことからさらなる得点量産を期待して作られた2010年南アフリカ大会の公式使用球「ジャブラニ」であったが、真球に近づいたことで予測不能な変化を起こすボールの影響から、今大会は全体的に守備色が濃くなるという真逆の結果となった。そこで本研究では、2010年大会のデータを中心にFIFAワールドカップの歴代のボールと戦術の変遷をまとめ、ボールは戦術に影響を与える一要因であることを明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究では主に、文献購読、データスタジアムからのデータ提供及び、FIFA公式サイト掲載のワールドカップ各試合データのスタッツ分析を中心に研究を進める。

【結果】

2006年ドイツ大会と2010年南アフリカ大会のロングパス成功率の比較において、30m以上の距離では成功率の差は+2.80%で、40m以上の距離では成功率の差は-5.50%、50m以上の距離では-4.40%であった。2006年大会と2010年大会との比較でロングパスの成功率に最も差が見られたのは40m以上の距離であった。しかし、ロングパスが全パスに占める割合自体には変化があまり見られなかった。また、同比較においてグループリーグ48試合分のデータを元に3項目（シュート数・枠内シュー

ト数・枠内シュート率）を算出した結果、2010年大会はシュート数で180本上回ったものの、枠内シュートは50本減、枠内シュート率は10.13%減と2項目で2006年大会を下回る結果となった。

【考察・結論】

2010年南アフリカ大会公式球のジャブラニは、大会前から蹴った感触が軽いボールで、無回転のシュートが思わぬ変化をすることは知られていたが、大会後の各データ結果から、回転をかけてもあまり落ちない、予測よりも大きく伸びるなど、スタジアムが高地にあることも影響して、特にロングパスのコントロールが難しいことが明らかになった。長距離のパスのコントロールが定まらないその影響は大会序盤の欧州勢により多く出ており、ショートパスとロングパスをバランス良く織り交ぜていくのが定石の国々は、ロングパスでミスが多発するのでリズムをつかめなかったこともヨーロッパ勢の大会序盤の不振といわれた原因の一つであろう。また、優勝したスペインは総得点8得点という歴代優勝国の最少得点であったことからわかるが、得点シーンの減少がデータからも顕著に現れた。今大会のほぼ全てのチームがゾーンディフェンスを採用しており、規則的なポジショニングで組織的に守ることを徹底していた。これは短期間で結果を出さなければならないワールドカップであり、誰しもが負けたくなかったが為に、より簡単で成果の出やすい戦術を採用したのでであろう。また、ここ数年は、フォワードにも守備での貢献が求められる傾向が強くなるなど、チーム全体のディフェンスが強化されている点もあげられるが、やはりジャブラニの不規則な変化がもたらす影響も大きいであろうと考える。ボールの進化・変化が戦術に影響を与えていることが各データの分析結果から明らかであることから本研究でボールは戦術に影響を与える一要因であると言えるのではないだろうか。

